



©Yuki Nakase

ナンシー・ホルト『ホールズ・オブ・ライト』

## 新年の抱負

1月の仕事はなにかと厄介です。一番の理由は仕事の工程に年末のクリスマス休暇を挟み、この時期は皆が仕事を一旦停止して家族や親しい友人と時間を過ごすことが公認なので、仕事が進みません。したがって休暇までに仕事を終えたいと思うのが平均的な感覚で、どんなに延滞していた部署も12月中旬までに重い腰を上げて仕事を片付けるのですが、照明班だけは別です。年頭に控えている公演の装置や映像デザインがクリスマスまでに提出され、皆は「わーい、終わった!」と潔く休暇が取れても、照明家は待ちに待った装置や映像の図面を元に照明の仕込みを考え、年始の仕事開始に間に合わせるため休暇中に働くことになります。先輩の照明家にこのことをばやっていたら、「Welcome to join the club」と言われました。

ディア・チェルシー美術館で開催されているナンシー・ホルト展に足を運んだのは、昨年最後の公演が開けた次の日でした。1月に控えている作品の準備に追われる“クリスマス休暇”を目の前に控え悶々としていましたが、ホルト氏の作品で気分が晴れた気がします。お目当は、1971年から思考錯誤が繰り返され、1973年に発表された『ホールズ・オブ・ライト』と名付けられた部屋型のインスタレーションでした。部屋のサイズは、長さ27フィート、幅20フィート、そして高さ15フィートで、上の写真で見えていただけるように、左右の壁の中段にそれぞれダブルエンド750ワットのハロゲン電球を使用したレンズなし照明器材が設置されています。真ん中に仕切られた壁には直径10インチの穴が斜めに8つ開いていて、左か右の照明器材が点灯することで、対面の壁に直径20インチの8つの丸い光が出現します。1分45秒おきに左右の照明器材のオンオフが切り替わり、明暗と8つの丸い形の光が対面の壁に“移動”します。

いつも、“シンプル”という言葉を使っはいけないなと思うのは、このような作品に出会う時です。たった2台の照明器材が2つのキューを行って来いするだけのミニマムなアプローチを用いて完璧なフォルムを描くまでの計算と実験は、計り知れないでしょう。その証拠に、1973年に描かれた作品の詳細が記されたホルト氏のスケッチとディア・チェルシー美術館で展示されている光と影が、ほぼ同じで驚きました。唯一の相違点は、1973年に使用された電球が650ワットだったことです。暗い部屋が明るくなったり、明るい部屋が暗くなったり、丸の模様が白になったり黒になったりするのを見ていて感じたことは、一台の照明器材で表現できることが無限であることと、照明デザインという仕事を職業として選んでよかったという気持ちです。明暗の入れ替わりは物事の二面性を比喩しているように見え、また作品との距離と視点によって見える風景が全く変わる体験はトンネル・ビジョンを自覚させられました。私が今見ているこの世界も、私が変わることで全く違う世界に見えるのかもしれない。

先述の先輩照明家が私に「仕事以外に興味を持つことが照明家として生きる上で唯一の術だよ」と言いました。パフォーマンス・アーツの公演と劇場建築のコンサルタント等で世界中を飛び回る彼が、仕事から距離を作って率先して行うことは、家族との時間を大切にすること、サイクリングをすること、絵を描くことだそうです。多忙極まりない彼がどのように時間を管理しているのか本当に謎ですが、彼の繊細な光と共同制作者との穏やかな関わり方を見ていると、確かに仕事以外の趣味が彼に複数の視点をもたらし、心に余裕を与えているように見受けられます。新年の抱負は、時間を上手に使う、に決まりですね。今年もどうぞよろしく願います。